令和７年度入賞作文　最優秀賞

身近なことから世界に向けて

北海道教育大学附属函館中学校　三年　九島　希奈

私は水を無駄遣いしていた。それに気づいたのはつい最近の母の「この水、どのくらいきれいなのかわかっているの。」という一言がきっかけだった。普段何気なく飲んだり、使ったりしている水のきれいさなんて考えたことがなかった。それどころか、日本や世界の水問題について知らず、特に何も考えずに過ごしていた私は、水が人間にとってどれだけ大切なものなのかということを一日でも早く理解しておくべきだったと後悔している。

私には、毎朝顔を洗い、麦茶を飲み、朝ご飯を食べ、歯を磨いてから学校に行くというルーティーンがある。この一連の動作では、終始水道から出た透明なきれいな水を使っている。学校生活の中でも、家から持って行く水筒、手洗い場、トイレなど様々な場面で透明な水を使用している。むしろ濁っている水など普段の生活では目にしない。夜にはお風呂に入る。人間が一日の中で一番水を使う場面であるが、もちろん濁っていないきれいな水である。私の家では水を多く使う場面が他にもある。お風呂はもちろん、トイレ、食洗機、洗濯機など一度に大量に使うことができる。私はこんな一日が「あたりまえ」だと勝手に思っていた。

しかし、この「あたりまえ」に変化が訪れた。ある日、家の水道から出た水が少し濁っていた。私はそれを不自然に思い、使用するのをやめ、ペットボトルの水を飲むことにした。あとから母にこの出来事についてその時の写真とともに話してみると予想外の反応が返ってきた。「全然飲める透明度。この水、どのくらいきれいなのかわかっているの。」と。母の返事に納得がいかず、世界中の水について調べてみたところ、私の見た水なんて、まったく比べ物にならないほど世界には不衛生な水を生活に使用している国があることがわかった。

この世界に住む十人に三人は安全な水を使用することができず、動物の糞尿やウイルスなどが混じっている危険な水を使用している。その理由の一つとして「世界における水の使用量増加」があげられる。主に農業などに水が使われるため、生活用水や飲料水が不足しているのだ。そのため、生活で使用せざるを得ない不衛生な水が原因で命を落とす子どもが毎日七〇〇人にものぼっている。下水道設備が整っていないことや石鹸を使った手洗いができないことによって不衛生な環境となり、特に抵抗力の弱い小さな子供にはこの水問題は深刻だ。

もっと身近なものであれば、衣料品がその一つだ。様々な色や模様があり、毎日のように着ている。だがたった一枚のコットン製のTシャツを作るために必要な水の量は、二七二〇リットル。ひとりの人間が三年かけて飲む水の量に値する。それに、衣類の染色などで生じる廃水は世界中の廃水のおよそ二〇パーセントを占め、水質汚染にもつながっている。

普段からきれいな水が水道から供給されるため、水不足に困ることの少ない日本に住む私。何も考えずにきれいな大量の水を普段から使ってしまっていた。その無駄遣いの積み重ねが世界中の水不足の加速につながっているのかもしれない。そう気づくことができたからこそ私は自分の行動のひとつひとつを大切にしようと決意した。

そのために私は家庭や学校生活、地域などを通して今から行動することができると思っている。洗い物などで水を出しっぱなしにしない、お風呂の水の再利用、それに衣服を無駄に買わないことが今の自分にもできることだと思う。小さなことからでも良いから、日々積み重ねていけばいつか地球のためになってくれる。そう考えながらこれからを生きていきたい。